

相互作用の展開決定要因—テクノ知とミーム知

杵渕 友子

1. 目的

ある状況下において、個人（行為者／アクター）同士の相互作用（コミュニケーション）がおこなわれるとき、そこには新たな状況が発生している。それだけでなく、新しく発生した状況は即刻個人に影響を及ぼし返し、影響を受けた個人はつぎの相互作用に参加してまた、新たな状況が発生させる。しかし、同じ状況の影響下にあってもアクターが違えば相互作用そのものが違う展開になることも、われわれがよく経験するところである。また、同じアクター同士であっても、異なる状況下であれば、これまた違う展開になることもわれわれは知っている。このように人間同士の相互作用は、状況とアクターという2つの要因によって、相互作用の展開は別の結果がもたらされているのである。以上のような理解は一般的なものであるが、たとえば心理学の見地からも、個人と状況との関係には研究関心が向けられてきた。一言で言うと、相互作用に参加している「当事者たちと状況」との関係という構図になっている。さらに別言すると、相互作用をしている人間はオブジェで、状況は背景要因として捉える姿勢である。

小稿の関心は、相互作用でものごとが展開していくとき、どんな要因によって、未決定であったものが、決定されていくのかにある。すなわち、展開の可能性から決定の間どんな要因が働いているのか、である。複雑性科学に依拠すれば、現在進行中の相互作用の展開とそれを取り巻く状況に依存して決定されていく、となるだろう。すなわち前述の「当事者たちと状況」の構図ととれるものであるが、小稿は別の切り口で、別の構図を提示したい。

手順としてはまず、行動心理学者ミード（G. H. Mead, 1934）¹の所見と、ミードに複雑性科学の所見と相互作用論を加えて発展させたステイシー（R. D. Stacey, 2001）²の議論をおさらいする。つぎに、ステイシーの作成による「身振り—反応関係にある個人間相互作用」の図を紹介する。それは道具や人間以外の環境をバックに相互作用をしている2人の個人を俯瞰した図である。これも「当事者たちと状況」という構図にほかならない。

小稿では、相互作用の展開に作用する要因を今少し明確に示すという目的の下、ステイシーとは別の構成図を試作してみた。それは、個人が他者と出会い、身振り—反応過程を

開始するとき、まず他者の反応に対して適応行動をとろうとするが、それが一つ目の要因である。たとえ相手からまだ何の有意義身振りを示されてなくとも、相手の反応を予想して初身振りを発するので、結局は反応と違わない。すなわち身振りという発信刺激は、すでに反応であって、適応行動なのである。あることに注意を向け、一定の反応をさせるのは、当人の来歴である。いわば相互作用に参加している現在という時間と、意識という来歴（来歴を基礎に未来も予想する）の過去から未来へと流れる時間軸が交差している図である。ミードのタームで説明すれば、そのとき他者は「me」として自我に取り込まれ、社会的行動を促す。来歴は「I」として「me」と対話をして、個性を発揮するのである。この場合の「他者」の定義であるが、相互作用の相手である個人は当然のこととして、状況全般も含めるのが小稿の立場である。たとえば、相互作用に関係ある道具、資料、情報から始まって、所属集団の規範、時代的状况、世界情勢、自然環境などまでも含めているのである。それはステイシーの図との最大の違いであって、人間以外の要素も相互作用の相手として捉えているのである。たとえば、物言わぬ道具とどのようにコミュニケーションするのか、という疑問に対し、道具を使いこなせるようになるということは、道具の習得の過程で、必ず「me」として取り込んだ道具と「I」との対話が起り、上達に応じて使い手の自我の発達を促すはずだから、と答えたい。最後に、この概念図が現実の問題を解決は2つの水準で取り組まれていることを明らかにしたわけだが、それぞれの水準で機能する知識を、相互作用における適応水準ではテクノ知と、自発性水準の知識をミーム知と名づけた。そして、様々な事象をよりよく説明できるかどうか、検証を試みた。

以下、順を追って論考を展開する。

2. ミードのパラレル・ワールド

ミードはその著書のなかで、彼の行動主義は社会的行動主義のそれであるとした上で、精神および自我は、本質的に社会的産物、すなわち、人間の経験の社会的側面からの産物、あるいは現象であることを論証した。換言すると、「…一定の複雑な集団活動の社会的な全体を出発点とし、そのなかに（その要素として）それを構成している個々の個人のそれぞれの行動を分析」³したのである。

ミードはまず、ヴェント（W. Wundt）の提唱したパラレリズムの立場を継承し、物理的世界と意識の世界を区別した。そうすることで「対象そのものにかんする経験が、個人の経験と対比できる」⁴として、「一方に物理的^{シグナス}事物があり、他方に心的な^{メンタル}出来事^{イベント}があり」、「われ

われは、個々の個人の経験された世界とは、かれの脳の内部に宿る因果系列の結果とみなされると仮定する」⁵のである。小稿では、この2つを対照して捉える見方を踏襲してひとつの世界構成図を試作した。それを分析道具とすることを提唱するつもりだが、ここで確認しておく、物理的世界と心的世界の2つがあるということ、心的世界にあるのは、個人の経験の因果系列であるということである。さらにミードは、「人間という動物は注意力をもった動物であり、…われわれの知能過程のすべては、一定の型の刺激を選択する注意に基礎づけられている」⁶とし、「注意という領域には、かならずあるメカニズムが存在するのであり、そのメカニズムのなかで、われわれは他の刺激と関係させながら、さまざまな刺激を組織化することができる」⁷としている。すなわち、外界——それを身振りに狭義に限定すれば、すなわち社会的過程である——からの刺激が、心理、精神、意識といった内面で組織化されるという、2つの過程が平行しているのである。さらに、ミードは外界と内面をそれぞれ、運動過程と感覚過程という言葉換えをした上で、「実際の運動過程については意識しないが、それと平行して生まれている感覚過程を知っている」⁸とした。ただし、ここでミードはH. ミュンスターベルグ (H. Munsterberg) を参照して、「選択過程そのものはきわめて複雑であり、それを…パラレリズムとの関連で叙述することはほとんど不可能」⁹であるが、しかし、とヴントを引いて、パラレリズムを成立させるためにこの2つの世界が、「このような選択機能を遂行できる一定の中枢部がありうると仮定することによって、パラレリズムを可能にしようとした」¹⁰と述べている。その上でミードは、単に生物体と意識のあいだの平行説ではなく、それを一歩進めて、相互作用説を導入したのである。すなわち、2つの世界を区別することは否定せず、「物理的におよび生理学的に、そしてすべての人に共通なものとして決定される対象と、特定の生物体、特定の人間に特異なものである経験とを区別する」¹¹ことの正当性は擁護したのである。

一般に行動主義心理学が試みるのは、「個人の経験をそれを発生させる条件と相関させること」¹²であるとミードは述べている。すなわち、個人の内部、特に中枢神経系の内部で発生することと外部条件との関連において、一般的法則を見出そうということであるが、小稿では、そうした個人の経験と条件とを、因果関係としてではなく、2つともものごとが決定していく、あるいは世界を構成する要因として捉えるという見方をとりたい。繰り返し確認すると、2つの世界があるということ、人には個別の経験があるということ、2つの世界は相互作用をしていること、である。つぎに、それぞれの世界で起きていることを見てみよう。

まず物理的世界であるが、結論から言えば、それは身振りという刺激とそれに反応する身振りの交換が行われている世界である。ミードはヴントの提出した身振りという概念の重要性を強調している。ヴントが身振りに注目したのは、それが「…他の個体が反応する道具」であり、「一定の反応をひきおこしたとき、それ自身も、他の個体におきた変化にたいする反応のなかで変化するものだった」¹³からである。ミードは身振りのもつこうした社会的動作という要素に着目したのであるが、行動主義心理学者のミードの立場から個人の行為にアプローチしていることがここでも窺える。そして、身振りのなかで「…それと平行して、ある心的な状態、つまり個人がおこなおうとしていることについての観念をとまなうなら、そしてもし、この身振りが、他の個人におなじような観念をよびおこすならば、そのとき、その身振りは有意味身振りとなる」¹⁴として、身振りの交換の結果、すなわち相互作用の結果、意味をとらえる精神が創発してくるという考えを提示している。ミードは、身振りという動作は、他の個体を刺激するが、そのときヴントの言うような身振りの模倣は起こらないが、「人は、他人のなかにひきおこす態度を、自分自身のなかにひきおこす」¹⁵という意味では模倣のメカニズムがはたらいっていると、精確に認めているのである。そしてそのとき刺激は、今述べたとおり、有意味になるというのである。同時に、他者を認識することで自我が自覚できるようになるとも述べている。¹⁶つまり、ここで物理的世界の出来事が心的世界に現象するのである。

ミードは、「諸君は、他人が返答するように、たえず自分自身に返答している。この返答には、ある程度同一性がなくてはならない。それは共通な基礎にたつ行動である」¹⁷と述べているが、この含意は深い。すなわち、(1) 自身と他者との内なる対話、(2) 相互作用に一貫性あるいは秩序がある理由、(3) 共有状況の存在が、宣言されているのだ。このように外界と内界は同時に成立し、瞬間瞬間の物理的世界の過程は、内なる心的世界のプロセスと同時に進行していく。この同時成立している状況を1つと捉えることは自然なことではあり、特にミードたち行動主義心理学者の場合は、個人の心的世界に対する外界からの作用の相関的法則を見つけようとしているのである。

しかし、厳密にはそこに(4) 時間的ズレがあることもわかる。すなわち、他者の反応を事前に予測するという上述の議論をつきつめていけば、ある個人の最初の身振りは、相手の態度（それは身振りとしては表現されていない段階）が役割取得的に取り込まれるところから始まるということである。ミードは自身に内面化された他者態度を「me」と呼び、それに対する反応的態度を「I」と呼んだが、「I」の反応が身振りとしてはじめて表出され

てスタートするのである。すなわち、そこには「I」と「me」との内なる対話があるということで、ミードはそれをたとえて下稽古^{リハーサル}¹⁸などと呼んだりしている。別言すると、反射ではなく反省というリフレクションをする時間である。小稿ではすでに表明しているとおり、これを個人と状況要因という見方ではなく、2つをもう少し独立的並列的に捉えた分析態度を取ることを提唱したい。上述の内なる対話あるいは下稽古のある分、外界情報はつねに現在のものではなく、一瞬前のものということであり、厳密にはそこにスピリットが生じているということも2つに分けて捉えられるのではと考える根拠である。

こうして分けた上で、改めて相互作用を見てみると、まず外界に有意味の身振りというシンボルがあり、それに注意が向けられ、内なる対話の結果、身振りが選択されて、外界に表出されて相互作用があるという流れになっているわけだが、そのときどんなシンボルに注意が向けられるのか、どんな選択肢が検討されるのか、その結果何が選択されるのかを決定するのは、「I」（あるいは自我あるいは精神）という要素が大きく作用しているということに焦点を導きたいのである。「me」は、相互作用の相手の反応と言ったが、相手を拡大解釈していけば、「me」は集団や社会の価値をも表象しているとも言える。相手が個人であろうと集団であろうと、「I」の反応は適応行動であるが、そればかりではない。ミードは自我の「I」の側面にこそ新奇なものが生じる可能性を認めており、「ある意味でこの自我の実現をこそ、われわれはたえず追求しつづけている」¹⁹と言うぐらい重要な部分である。このように自我は有意味身振りの相互作用により発見されていくことなので、自我は歴史的時間の産物ということになる。それは蓄積的というよりは、つねに相互作用によって書き換えられていると捉えるのが自然であろう。書き換えは相互作用に依存しており、自我の実現はどれくらい相互作用にコミットしているかで決定するところにある。

以上のことから、身振りの相互作用がおこなわれている物理的世界と、他者の役割を取り入れて自己決定していく心的世界、という2つの世界を状況要因として分けて捉えてみると、前者は瞬間瞬間ごとに進行している現在という時間の世界で、後者は前者の相互作用を逐次（スピリットがあると、すでに論じたとおり「即時」ではない）取り込んで更新を繰り返してきている歴史的時間軸にある世界ということになる。

3. ステイシーの批判的修正案

以上見たとおり、ミードは他者との身振り交換と自我の関係を明らかにすることに主眼を置いていた。ステイシーはその点を突いて、ミードの成果を大いに認めた上で、そこに

複雑性科学の思考を取り入れることを提唱している。それは、ミードの議論は個人の自我の発達を社会的過程の進展と同調させて捉えたものであるが、多数の人間と多数の人間との継続的循環過程の洞察をするためには、複雑系システムを類型として採用することが必要であるとしたからである²⁰。この提案の背景にあるのは、現代社会の情報化が進展する以前の時代と比較して、世界が格段の拡張と複雑性を帯びるものになったからに他ならない。そのような新環境下での人間行動の理解には、大勢の人間の複雑な同時相互作用を扱う複雑性科学という思考ツールが必要になったということであろう。複雑適応システムの構造をステイシーは以下のようにまとめている（拙訳したものを要約したもの）²¹：

- ・多数の個別エージェントで構成されているシステムである。
- ・エージェントはそれぞれ局所的に相互作用をするが、相互作用の支配律は各エージェント独自のルールであり、システム全体を司るルールはない。
- ・各エージェントは独自のルールに従うので、相互作用は反復的、循環的、自己言及的である。
- ・各エージェントの相互作用ルールは、相互適応させていくものである。相互作用は非連続であるが、この非連続性が多数のエージェントの多様なルールの証である。
- ・ルールの変更はランダム変化と反応のクロスオーバーによって発生する。

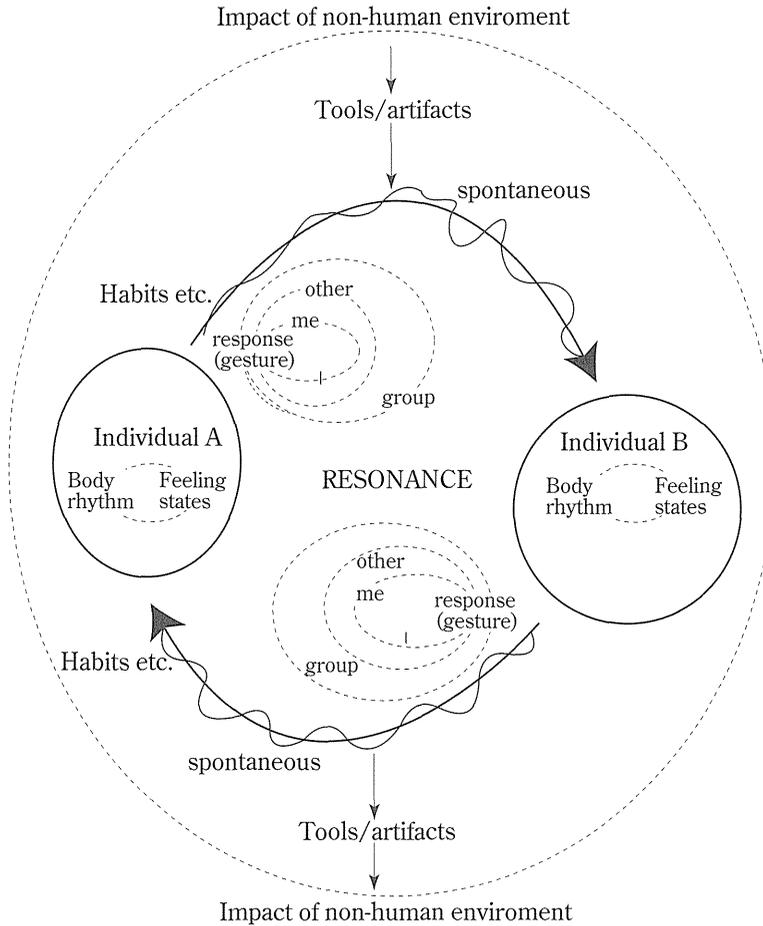
ところで、人間行動の理解には、「システム論で思考するのは限界がある」²²としているステイシーであるが、複雑系システムは「システム論の枠組をこえたところを目指している」²³と見ているからである。すなわち、複雑系システムの相互作用には継続性と変革性を発生させる可能性と、相互作用過程そのものに継続性と変革性をパターン化させる本来の能力があるという可能性とを見たからである²⁴。それについてステイシーは、複雑系シ

a ステイシーは世界の秩序立てを論じる目的論として、Rationalist Teleology, Formative Teleology と Transformative Teleology とに分けて説明している（参考文献に掲示した著書の p27 と p60 にまとめられている）。要約すると、順に、秩序は、人間の理性によって生まれる、すでにある目標（形）によって生まれるとするのだが、最後の Transformative は、「未来は関係づくりの不断の過程を通じた継続的構築の下にある（同、p68、3行目）」という発想で、したがって秩序は相互作用そのものに潜在していると考えられるものである。ここで批判的に取り上げられているシステム論的思考とは、システムの外部に設計者を想定している Formative Teleology の枠組に属している。

ステムの思考は Transformative Teleology³による見方であると整理している。この目的論により、どのようにそれぞれ固有の組織原則をもった多数の個人による相互作用が、新奇性を伴いつつ統一的パターンで継続的循環的過程を成立させているかの洞察が可能になると考えたからである。換言すると、人間行動の理解には何より複雑性科学の提示する相互作用論が適当であるということ、ただしその相互作用の秩序は、外在的力によって支配されていると考えるのではなく、「相互作用の内部にある視点から語る」²⁵ことから生まれるということ（それが Transformative Teleology の見方）を強調するものである。

ステイシーはミードの個人間相互作用の過程を段階的に5つに分けて図化している。それは就中、自我の発達過程を示すものでもある。なぜなら、ミードが論証したとおり、自我発達の過程は社会的過程の進展と同調しているからである。ステイシーはまず、ある文脈のもとで2人の個人同士の身振り―反応の相互作用を図化した。²⁶第2段階ではステイシーが言うところの、他者の反応を予想しつつそれを対話をする私的ロールプレイ（ミードではたとえば、「下稽古」という比喩）を加えている²⁷。第3段階では他者に所属集団を加えて描くことで私的ロールプレイの段階が進化していることを表現した²⁸。第4段階では、個人の自我／精神をあえて個人の身体の外部に描くことで、それらが個人の内部にではなく相互作用過程に立ち現れていることを示している²⁹。さらに、「I」と「me」が書き加えられ、自我が発達してきていることを明示している。最後に、習慣といった一定の反応が期待される行動すらも、つねにまったく同じにはならないことを示しているが、それは不規則な波線で表現されている。小稿では参考として、この第5段階の図「習慣的および自発的身振りとその反応の関係図」だけを掲げることにするが、よく見ると個人Aの外部に破線で描かれた自我の一部がわずかに膨らんでいることが見てとれる。この膨らみは2段階目の図から登場しているもので、私的ロールプレイの結果、既成の枠組を超えた新奇性反応が生じる場所を図示しているものと思われる。これが人間の創造的発想の誕生である。あるいは個性の自由な発揮と言ってもいいだろう。この図を今一度、確認してみると、個人Aと個人Bが出会ってコミュニケーションをするとき、それぞれの相手や彼らが属する集団が、彼らの身振り―反応に役割取得されるようになること、その反応は役割取得されたものばかりではなく、すなわち習慣化されたものばかりではなく、自発性が発揮される余地があることを示したものである。そして彼らのコミュニケーションを取り巻いているのは、道具や人工物、さらにその周りには人間以外の環境からの影響も受けていることが描かれている。

図1 身振り—反応の関係図—習慣性と自発性



出典：Stacey, Ralph D. (2001) *Complex Responsive Processes in Organization-Learning and Knowledge Creation* p 97 Fig.4.5

3. 相互作用の決定要因

ステイシーの「身振り—反応」の概念図はすでに述べたとおり、ある文脈のもとで2人の人間がコミュニケーションをするというところからスタートしている。当然、図からも明らかのように、文脈が背景で人間が前面になる。この何気ない描き方そのものに西洋の見方のバイヤスがあると、小稿では考える。すなわち、個人同士が相互作用をしているとき、道具や人工物、人間以外の環境要因が背景になっている点である。ミードが主張したとおり、自我の発達に伴って私的ロールプレイが行われるとき、「me」はいわば他者の代理となるというのであれば、他者は自分以外のすべてと拡大解釈されるべきではないだろうか。そして、世界は「I」と「me」として取り込まれた他者だけで構成されることにな

るのではないだろうか。複雑適応システムにおいても、個別エージェントがシステムを構成しているとあったが、それも西洋の個人主義の一形態と言えるであろうから、それを当然視すれば個人を出発点に考えるようになるのだと思う。あるいは、ここではステイシーはただ、個人と状況の関係を解明しようとする行動主義心理学者ミードの姿勢に引っぱられて、このような図を描いたのかもしれない。いずれにせよ、ミードの主張にしたがえば、そしてステイシーもそれを踏襲しているのであるから、自我と社会は同時に発生するものであり、どちらかが先行／後行、高次／低次、優位／劣位、といった「主たるもの」対「従たるもの」といった対比をして個人とその他の世界を捉えることは誤りのはずである。しかしステイシーの図はその点については、自覚的に処理していないので、ミスリーディングを免れ得ないのではないだろうか。小稿では、この個人と世界の同時発生をより明確にするために、ひとつの概念図の作成を試みた。ただ、ステイシーの作図の意図は、個人間相互作用において、自我が発達してくるところを段階的に示したかったということであろうから、それ以外のところに焦点は当てていないので、それらに対して自覚的でないのは、当然といえば当然ということも言えなくはない。いずれにせよ、ステイシーは世界を、当事者たち人間と、道具／人工物、ノン・ヒューマン環境に分けて捉えているが、小稿では当人とその他という具合に、相手である人間や道具も含む他者という、異なる捕捉による作図である。

図2 当人から見た相互作用の決定要因

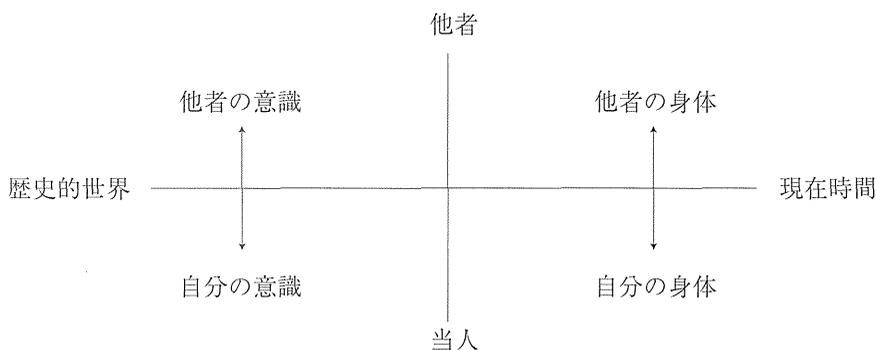


図2における「他者」は、相互作用の相手である個人や道具などと述べたが、所属集団の規範、組織の価値観、社会風潮、世界情勢、そしてステイシーの図にはなかった自然環境まで拡大解釈して含めることも視野に入れている。さらに、communicationの語源が、宇宙精神との交流であることを思い起こせば、最拡大定義はその範囲すらも想定できるの

だ。アニミズムということではなく、道具のみならず植物や、山や海、雲や虹、雨や雪、などの自然界と確かに人はコミュニケーションすることがある。それがときに A-ha 体験をもたらすとなれば、精神の成長があったことを認めざるをえまい。言うまでもなく、この相互作用過程の図はスナップショットであり、刻々と変容していく瞬間を捉えたものである。

以下、この相互作用図の説明である：

右半分の相互作用：物的世界である

社会的過程である

現在進行中の時間である

身振りによる相互作用が行われる

相互作用の結果は相互の身振りと反応に依存している

相互作用そのものに意味が現れ、すなわち予想が確定するフィーリングの交換がある

左半分の相互作用：心的世界である。すなわち、自我、精神、意識の世界過去から未来に流れる時間である

自分の身振りに対する相手の反応、すなわち相手の意識を予想する
(未来)

経験の蓄積 (過去) である

「I」と「me」の私的ロールプレイが行われる

身振り (反応) を知覚し、反応 (身振り) を選択する。

上半分の相互作用：他者の身体と当方が予想する相手の意識で構成されている他者の意識は「me」として取り込まれる

他者の意識と身体の間は当人の解釈に依存する

下半分の相互作用：自分の身体と意識で構成されている

中枢神経でつながっている

同時発達する

「I」が選択した反応を身振りで表出して相互作用に影響する

先述したとおり、相互作用を支配するのは各エージェントのもつルールであるとする、エージェントは現前の相互作用に身振りで参加している身体と、相手の反応を予測したり当方の反応／身振りを選択する意識とで構成されていることがこの図で示されている。ここでは反射的反応は視野にいれていないが、それは有意味身振りしか経験過程を通過しないと考えるからである。図2で確認できるのは、相互作用の展開は、相手の出方と当方の来歴的意識という2つの要素で規定されるということである。全体を統制するルールはないが、つねに相手の反応を考慮しているということ、それでいて自分の身振り／反応の選択には自由の余地があることがわかる。他者の目としての認識と自分の来歴という2つの行動要因が相互作用に一貫性をもたらしている。

4. 適応性と自発性を支援する知識—テクノ知とミーム知

相互作用の展開が、適応性と自発性の質に依存して決定されることを見た。ここではこの2つの要因を支援する知識について考察してみよう。

図2の右半分の世界は、たとえば言えばケインズの言う、「今そこにある危機」がある現状であろう。すなわち、当面の問題状況に対して、問題解決のための反応をしている世界である。だとすると、そこで役に立つ知識は、問題解決の直接的に役立つ技能的知識に違いない。それを小稿では「テクノ知」と名づける。そして、現前の状況を歴史的視野と世界的視野で俯瞰して、数あるテクノ的知識の選択の判断を行っているのが左半分の世界にある、自分のこれまでに培った知識であって、それをここでは「ミーム知」と名づけておこう。ミームとは、『利己的な遺伝子』(*Selfish Gene*, 1976)の著者であるリチャード・ドーキンス(R. Dawkins)の造語で、生物学的定義におけるミームとは、「文化の伝達や複製の基本単位」である。因みに資生堂会長である福原義春氏はそこからヒントを得て、ミームを「文化的遺伝子」として、同社のアイデンティティやメセナ活動の理念の中心に据えている。小稿では、この資生堂の考え方に依って、「歴史的時間と未来時間を現在という時間に凝縮して表れるもの」とする。また、ピエール・ブルデュー(P. Bourdieu)の言う、これは出身階級や出身地によって形成・相続されるハビトゥス(社会的習慣)が基層がたらず知識であるという解釈も成立するだろう^a。教養知も代替候補に考えたが、かつての

a ピエール・ブルデューは、『遺産相続者たち』『再生産』『ディスクリプション』などで、再三そのことに言及している(『教養主義の没落』2003年 竹内洋著 中央公論社 p124)。

エリートイズムを連想させるので、ここでは退けている。ただ教養のもつ機能までも否定しているわけではない^b。

一方、テクノ知とは、即戦力としての知識のことで、各種資格が規定する知識、マニュアル的知識などで、高度に標準化、専門化が進んでいる知識である。すなわち、個性の差が出ないように定型化されたものである。別言すると、ある状況に対して一定の対処法が開発されていて、問題と解答がほぼ一対一で対応しているものである。一方、ミーム知とは、意識や精神といった過程にあるもので、個人の知的来歴のみならず、出身家庭、地域、時代、民族など長期かつ広範にわたる影響の蓄積の結果としてあるものである。それは教養のみならず、価値観、倫理観など当人の人生観をも形成するもので、人格の涵養に資するものである。たとえば、日産のカルロス・ゴーン (C. Ghosn) の経営手腕に、氏が熱心なカトリック教徒であるという事実を関連づけて見るとすれば、ミーム知に宗教的信念を包含することもできよう。そうなると、ミーム知は当人という人間の存在基盤であるとも言えるのだ。換言すると、テクノ知は当面の問題解決に対応する知識、ミーム知は当面の問題を相対化して対応する知識と言えよう。

ここで野中郁次郎 (1999) が展開している「暗黙知」「形式知」との違いを述べておこう。野中の定義によると、「暗黙知は、言葉や文章で表すことの難しい主観的で身体的な知識のことで、具体的には、想い、視点、メンタル・モデル、熟練、ノウハウなど」のことであり、「形式知は、言葉や文章で表現できる客観的で理性的な知識のことで、コンピュータ・ネットワークやデータベースを活用して容易に組み換えや蓄積が行えるもの」のことである³⁰。そして暗黙知はいわばアナログ的な知で、形式知はデジタル的な知であるとも述べている。

一方、マイケル・ポランニー (M. Polanyi, 1966)³¹の暗黙知にも触れておくと、それは「言葉にできるより多くのことを知ることができる」³²という事実に基づいている。暗黙知によりわれわれは、「問題が徴候として示しているある実在^{リアリティ}への手掛かり…が指示している『隠れた実在』が存在するのを感じて、その感覚に導かれ」³³て、追求していくのである。以上に見るように、野中の「暗黙知」は、ポランニーに示唆はうけてはいるものの、両者は似て非なるものである。ポランニーは新しい知識の発見はどのように可能な

b 井上俊は、文化の作用、すなわち教養の機能として「適応」「超越」「自省」を挙げている (同上, p240)。

かについての洞察であり、野中は、いわば発見済みではあるが成文化されていない、あるいは完全なる成文化が困難な知識を指している。

以上から明らかになったかと思うが、小稿のテクノ知は、野中の言うところの形式知と暗黙知のほとんどを包含するものである。一方ミーム知は、テクノ知のもつ処方箋の選択判断に寄与する形で機能するものである。すなわち、問題解決に当たって技術的選択の幅を規定するのがテクノ知で、技術的枠組を越えた資源を提供し、かつどれを選択するかの判断に力を貸すのがミーム知であると言えるであろう。

5. 結語

以上、ミードによる自我・精神と社会の同時発生の理論と、それに複雑性科学に改めて相互作用論を加えて発展させたステイシーによる「身振り一反応の相互作用図」を紹介し、小稿ではそれらの所見を基礎に、「相互作用の決定要因」を明示するための図を提示した。決定要因は2つで、相互作用の適応の質を規定するのはテクノ知、相互作用の方向を規定するのはミーム知であるということであった。

こうして見てみると、テクノ知に長けた医者や法律家が必ずしもベストのパフォーマンスをするとは限らないのは、ミーム知が未発達だからであると説明できる。すなわちテクノ知と、自我との相互作用を通じて形成されるミーム知とのバランスが不均衡なのである。さらに科学者で言えば、原爆の開発はテクノ知、その使用を禁止するのがミーム知である。また、経営にしても、たとえばMBAを取得したような「有能な」経営者が、不祥事を起こさないという保証はないということも説明できる。テクノ知、ミーム知をそれぞれ、定型知、非定型知とくれば、管理者にヨリ求められるのはミーム知ということになる。そして、そのほとんどの業務が非定型業務となるトップリーダーにとくに必要な知識は、ミーム知であるということも明らかになった。こうなると、ガルブレイス(J. K. Galbraith)が『新しい産業国家』(*The New Industrial State*, 1967)で、専門的経営者に対してテクノクラートという造語で命名したのは、至当と言うべきか、あるいは皮肉と言うべきなのか。

ここで付言しておきたいのは、だから教養は大事だ、大学に一般教養課程を復活させようなどと考えるのは短絡に過ぎるということである。それらが無駄であるとか、あるいはもっと過激に、有害であるなどというのと言うのではない。それらの知識が、日々の生活のなかに溶け込んでいること、すなわち経験のレベルで身につけていることが大事なこ

とであって、それは歴史的時間の産物なので、むしろ必要なのは、現代における時間のゆとりである。この議論は、これ以上は小稿の議論の枠を越えるのでここまでとする。ただ、「me」が発達すれば、朱に染まるという同調の圧力も増すわけで、その分「I」によるコントロールが必要になるということである。テクノ知の暴走、迷走を防ぐのがミーム知であるので、「I」と「me」のバランスのよい発達は、人類の幸福にとって非常に重要な課題と言えるだろう。

【引用文献】

- 1 Mead, George H. (1934) *Mind Self, and Society; from the Standpoint of a Social Behaviorist* Edited and with an introduction by Charles W. Morris, the University of Chicago Press (『現代社会岳体系 10 ミード 精神・自我・社会』1973年 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳 青木書店)
- 2 Stacey, Ralph D. (2001) *Complex Responsive Processes in Organization-Learning and Knowledge Creation* Routledge
- 3 ミード, 上掲書, p 9 下段 3行目
- 4 同上書, p36 下段 19行目
- 5 同上書, p37 上段 11行目
- 6 同上書, p29 上段 18行目
- 7 同上書, p30 上段 20行目
- 8 同上書, p32 上段 13行目
- 9 同上書, p33 上段 4行目
- 10 同上書, p33 上段 14行目
- 11 同上書, p36 上段 8行目
- 12 同上書, p43 上段 16行目
- 13 同上書, p49 下段 19行目
- 14 同上書, p54 上段 4行目
- 15 同上書, p73 上段 12行目
- 16 同上書, p205 から始まる「25 自我の両側面としての『I』と『me』」の項
- 17 同上書, p74 上段 11行目
- 18 同上書, p192 上段 6行目

- 19 同上書, p217 下段 18 行目
- 20 Stacey, p92 131
- 21 ibid. p71 pp18-31
- 22 ibid. p69 114
- 23 ibid. p70 13
- 24 ibid. p70 117-11
- 25 ibid. p71 15
- 26 ibid. p80 See Figure 4.1
- 27 ibid. p85 See Figure 4.2
- 28 ibid. p87 See Figure 4.3
- 29 ibid. p90 See Figure 4.4
- 30 野中郁次郎 (1999) 「組織的知識創造の新展開」 Diamond Harvard Business pp38-48
- 31 Polanyi, Micheal (1966) *The Tacit Dimension* Routledge & Kegan Paul Ltd. (『暗黙知の次元』2003 年 高橋勇男による新訳 ちくま学芸文庫)
- 32 同上書, p18 7 行目
- 33 同上書, p50 2 - 5 行目